
兄転生、妹召喚

睦月 朔日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄転生、妹召喚

【Nコード】

N5490X

【作者名】

睦月 朔日

【あらすじ】

最愛の妹を事故で助けた主人公は、気が付けば見知らぬ草原へ。

しかも、目の前には生意気なガキ（自称神）がいらっしやる。

しかーし！ そんなことどうでもいい！！ つーか最愛の妹はどうなったのよ！？

え？ そもそも俺死んでる？ 妹に会えない？！ 転生させてくれる？ しかも、以前までプレイしていたゲームキャラと同等の能力もくれるって。

ふむふむ。つまり、ああしてこうすれば……。

元の世界の知識と主人公のチート能力を駆使して、剣あり、魔法あり、魔王ありの世界で重度のシスコンが織りなすラブコメ？ファンタジー。

作者が初心者なので、温かい目で見守っていただけると嬉しいです。

〈第0話 プロローグ〉（前書き）

どうもはじめまして。

睦月朔日と申します。

正直趣味で執筆なので、何ぶん拙いと思いますが
出来れば温かい目で見守っててください。

また、誤字脱字等ありましたら、じゃんじゃん指摘してください！
では、お楽しみください。

〈第0話 プロローグ〉

「ミコトー！」

気がつけば、そこは見知らぬ場所だった。

あたり一面、緑の草原の広がっており、木が一本と小さな小屋がある、そんな場所だった。

「っ……！ こっは……どこなんだ……？」

全く見覚えのない場所に俺は動揺してしまっている。

「俺は確か……妹を連れて小学校へ連れて行く途中に……そうだ！
！」

「そうだね。キミは車に交通事故にあってしまったんだよ」

「っ……」

背後から声を掛けられて、俺は思わず仰け反ってしまった。

おもむろに振り返ってみる……が、誰もいない。

「え……。誰もいない……。これって、もしかしてゆづれ」おい！
こっちだこっち！」「……ん？」

俺は声のする方へと首を傾けた。

そこには、少年がいた。髪は金髪で赤と黒のオッドアイ。西洋の神様が着てそうな方から布をかけてある感じのローブ？を着ているみたいだ。

しかし、如何せん小さい。

どこかの小学生だろうか？ うーん、日本人には見えないんだけどな。

「ってそんな場合じゃない！！ 妹は！？ ミコトはどうなったんだ？ 確か車にはねられそうになって……、それで俺はがむしゃらになって妹を庇って……。妹はっ！」

「キミイ……。少しは落ち着きなよ。そんな沢山質問をされても一度には答えられないんだから」

確かに、俺は混乱しているかもしれない。

気が付いたら知らない場所にいる、目の前には知らない人がいて、でも！

「これが落ち着いていられるわけ無いだろ！ 妹が怪我をしてるかもしれないんだぞ！！」

そうなのだ。

最愛の妹が怪我をしてるかもしれない。

それは、俺にとってはすべての事において重要な問題だった。

「はあ……、まあキミの気持ちもわからなくはないか。そもそも、そのキミの意思がキミの妹の死の運命を変えてしまったのだからね」

「っ！ 死の運命って！？ 妹は無事なんですか？！ 知ってるんですけど！ 教えて下さい！！ つーか早く教えろ！ このチビが！！」

なんか事情を知ってそうなのに、いちいちもつたいぶるような口調のガキ（少年）に思わず、目の前の彼の身体的欠点となる所を叫んでしまった。

「いいから落ち着きなよ……。って言うか、さっきとても失礼なこと言わなかったかい！？」

まずい、聞こえていたのか。と言うか、まあおもいきり叫んだわけだし聞こえてしまっても仕方ないんだがなあ。

「あっと……、いいからそっちも落ち着いて！ それで、妹は無事

「なのか!？」

「まあいいだろう。キミの妹さんは無事だよ。キミが身を挺して庇ったわけだからね。本来キミが死ぬ筈はなかったんだけど、キミの意志の強さには呆れるねえ」

「そうか……、ミコトは無事かあ。」

「まあミコトが無事なら……、ん？　なんかさっき不吉な言葉が聞こえた気がしたのだが……？」

「誰が死んだって？」

「キミだ」

……

……

……はい？

あ、あの時の風景だ。

おお、ミコトと俺がいる。

ああ車が！ 危ない！！ お、俺が……、ナイス俺！！

よかったああああ。

妹のミコトは無事だったのか。

まあ妹が無事ならほとんど問題ないわけだが。

「しかし、本来死亡するはずだったのはキミの妹であり、キミは本来は死ぬべきではなかった。そこで、神会議の結果、急遽キミの寿命を彼女に与えることで帳尻を合わせることとなったのだよ」

俺の寿命か……。まあ妹が無事なら問題ないのだけど、つか神会議ってなんだろ？ そもそもこのガキ誰？

「まあ妹が無事だったのが分かればいいんだが、今更だがキミは誰？」

「ふむ。確かに今更感があるけど、確かに自己紹介をしていなかったね。では改めて自己紹介をさせて貰おうか。僕の名はアドニス。死と再生を司る神だ」

ほう……。神と来たか。

まあ確かにテンプレ条件は限りなく満たしていたし、ここで「俺が神だ！」なんて言われても、別に違和感があるわけじゃないしな。

「で、そんな神様が俺に何のよう？」

「あれ？ ここってビックリするところじゃないのか？ 僕は神だよ？！」

「そもそも、さっき神会議とか言ってたじゃないか……」

こいつ大丈夫か？ まあそもそも俺もこの環境に慣れてしまっているのもどつかと思っけど。

「ま、まあいいよ。僕にもあまり時間がないわけだし、端的に説明してくよ」

そして、自称神は端的に説明をしてくれた。

内容はこうだ。

俺はすでに死んでしまっている。
妹のミコトは親戚に引き取られて、無事に暮らしているらしい。
今回の件は神々のミスなので、お詫びに1つだけ願いを叶えてくれる。

んー、なんつうテンプレ。
まあいいか。どうせ、願うことなんて決まってるんだしな。

「じゃあ俺を生き返らせ」「無理だね」て……、なんでだよ！」

俺が願いを言っているさなかに、割り込んで来やがった。このヤ
ロウ！ ナメてんのか！！

「そもそも、生き返らせるといふのは無理なんだ。生き返らそうにも、キミはすでに死んでしまっている。そのためその死をなかつたことにするのは時を巻き戻すことになるし、それは時の神の管轄で僕の管轄ではないんだ」

なん……だと……。

俺は生き返れないのか。

それはつまり、最愛の妹と離れ離れにならなければいけないってことになるのか……。

.....

「じゃあ貴様（神）を殺して俺も死ぬ！」

「待て！ 待って！ 落ち着いてくれよ」

これが落ち着いていられるわけ無いだろ！

妹が死ななかったのは不幸中の幸いだけでも、妹に会えないって
どんな拷問だよ！

「ほら、生き返らせるのは無理だけど、記憶を残したまま、転生するの
は可能だよ」

.....む？ 記憶を残したまま転生だと.....。それはそれで
おいしい話だな。

待てよ。あれをこうして、これをこうして、こうなったらこれで
こうすれば.....。

「よし、じゃあ魔法がある異世界に転生とかならできるのか？」

「ほむ。それも可能だねえ」

「じゃあ例えば俺がプレイしていたFTOのキャラの能力を持つての転生とかも可能なのか？」

フェアリー・テイル・オンライン

FTOとは、フェアリー・テイル・オンライン 昨今主流となっているVRMMOのなかのタイトルの一つで、その特徴といえば職業創造システムにある。メイクジョブ

FTOではジョブを複数習得することが可能となっており、最大4つまでジョブを習得することができる。それによって様々なキャラクターメイクが可能なので、ユーザーに幅広く受けている。

俺の質問の意図を理解したのか、自称神が俺の頭に再度手をかざす。

「どれどれ、……、ああこの程度の能力なら許容範囲で可能だろうね。ただ、能力は可能な限り再現するけど、すべてってわけにもいかないよ」

「そつかあ。じゃあ魔法とかはちゃんと再現できるのか？」

「うん。それは大丈夫」

よっしゃー！！で、あればアレも可能になるはず。
あー、でも素体が必要なのか。

「よし、じゃあ決めた。FTOのキャラ能力を引き継いで、異世界に転生する。これが俺の願いだ！」

「了解だよ。まあこちらのミスだし、申し訳なかったが、新しい世界でも頑張っつてい寿命を全うしてくれることを願っているよ」

「あ、あと1ついいかい？」

危ない危ない、もう少しで重要なことを忘れるところだった。

「なんだい？」

「もう、妹のミコトに会えないのは仕方ないのだけど、出来たら思い出として、あっちの世界に何か持って行きたいのだけど」

「ふむ。まああまり高度なものは持っていけないけど……。何がいいんだい？」

「例えば、妹が大事にしていたビー玉程度で構わないんだけど」

「ガラスの玉か……。まああちらの世界でも作れないシロモノでもないわけだし。まあサービスだ」

イエス!!! これで、この計画も完成したも同然だぜ！
まあしばらくの間は大人しくしていなと行けないだろうがな。ケ
ツケツケツ。

「ん？ なんだか怪しい気配を感じただけど？」

「何でもないっすよ！ 何でもないっすよ!!!」

大事なことなので二回言いました。ええはい。

ふう、危ない危ない。

この計画は失敗できないしな。慎重に行わないと。

「さてと、そろそろ時間だね。何か言い残すことはないかい？」

言い残すことねえ。文句なら山ほどあるわけだけどね!!!

って言うか、俺死んだのってそっちのミスなんだしな!!!。

あ、なんか思い出してきたら腹が立ってきた！

「（ん？ 不穏な空気が……。マズイぞ。早く送るか）じゃあ、あ
ちらの世界でも頑張ってねー」

「あ、ちょっと待て！ お前！！」

自称神がそう言うと、僕は急に睡魔に襲われたかのように、深い眠りについた。

〜第0話 プロローグ〜（後書き）

2011/10/29 誤字修正

〈第1話 新しい家族〉

皆さん、お久しぶりです。元気にしていましたか？

僕は元気です。

そう言えば、自己紹介をしていませんでしたね。

俺の前世の名前は宮本 誠（26才）。俺の家族は歳の離れた妹だけだった。両親は妹が生まれてすぐに他界しており、はじめの頃は親戚の家に別々に引き取られていました。しかし、俺は唯一の肉親となる妹と暮らしたくて、高校を卒業後すぐに働きに出て、生活に余裕が出てきたあたりで妹を引き取ってふたり暮らしを始めていました。まあそんなこんなで、妹が事故に遭うまでは、恙無く暮らしていました。

それでね、妹なんだけどそりゃ可愛いものって、そんじよこれらのアイドルなんかには出せない可愛さが溢れ出していてね。ほんど、目に入れても痛くないくらいに可愛さなんだけど…。

え？ そんな説明いらないって。まあまあそれよりも…、イテ、コラ！！ 石を投げたのは誰だ！？

まあいいや、妹の事はまた今度、レポート用紙100程度にまとめて君たちに進呈しよう。

それで、今、俺は窮地に陥っている。

自称神に、「転生させてあげよう！」なんて言われて、俺は調子に乗っていたのかもしれない。

まさか、こんなことになるなんて。

「あらー。どうしたのかなー？ 私の可愛い赤ちゃん」

「ぶう……（母上……）」

そう、この目の前にいる。見事なスカイブルーの長髪の女性が俺の新しい母親だ。

エリオナール（17才）容姿端麗で、頭がとても良い。しかし、普段はどこか抜けているような話し方をする。

父上曰く母上を怒らせるとその人柄に似合わず、悪鬼羅刹の如く力を震わせるらしい。（内心、疑わしいところではあるのだが）それでも、滅多なことでは怒らないから、俺はまだその姿を見たことはないんだけどね。

「あらあらー。もしかしておしめの交換かしらー」

上記の流れで、お察しかもしれないが、あえて俺の口から説明すべきだろう。

そうなのだ、俺は今赤ん坊なのだ!!!

いや、確かに転生って言うてるんだから、赤ん坊から始まるのは仕方ないのかもしれない。

しかし、しかしだ!!

まさか赤ん坊の頃から記憶がはつきりしているなど、思っても見なかったよ!

こんな拷問でしかないじゃん!! なんなのこの羞恥プレイ。

まあ日々黒歴史を量産している訳だが、赤ん坊なのだから仕方ない。諦めるしかないのだから。

うう……。

と、まあ俺がそんな現実逃避をしているうちに、母上がおシメを取り替え終えたようだ。

「はい、これで綺麗になったわね。ホント可愛らしいわあ。食べ

「ちやいたいくらい」

母上、やめてください。

「お、レクサのオシメを変えたのか？」

そう言つて、颯爽と現れたのが、俺の父上。

ジョセフ（18才）眉目秀麗で黒髪長髪。誰が見ても、惚れ惚れする容姿を持つている。

白衣を着た姿は、薬師として生計を立てている父上にはぴったりだった。

薬師としても優秀らしく、母曰く、俺が生まれる前に風土病が蔓延していた時があり、

その時に父が処方した薬のおかげで、死を免れた人が多くいたらしく、今でも父を慕う人が多くこの村にはいるらしい。

「相変わらず、レクサは可愛いなあ。食べてしまいたいくらいだ」

そう言いながら、父上はオシメを変えたばかりの俺を抱き上げる。

「というか、父上！ 貴様もか！！！」

「ジョゼ、あなたもそう思う？」

「ああ、エリナ。勿論キミもとても可愛いと思うよ」

「あら、ジョゼだつてとてもカッコイイわよー」

また、始まったか。このバカップルめ！ まあ夫婦の中がいいのはいいことだしな。放おつておいていいか。

さてさて、先ほど俺の自己紹介の途中だったと思うので、この世界での俺の自己紹介をしておこう。

改めまして、俺の名前はレクセナル（0才）。まあ容姿は両親の血を受け継いだのだろうが、将来有望らしい。（まあ両親曰くなので、あまり期待はしていないけどね）

そして、髪型は黒髪なので、父親の血をそこは引き継いだのだろう。

まあ俺としては、黒髪に慣れてるし、違和感がないのでその点は良かったと思ってる。

次に、俺が暮らしている村のことだが、まだ、母親に抱きかかえられてでしか出かけたことがないのだが、どうやら見た感じでは漁村になるらしい。

俺の家は、丘の上に作られているらしく、ちょっと村からは離れていた。村は海に近く、特に特産物があるわけではないので、辺境と言ってしまうはそれで済んでしまうのだが。それでも、夜になれば、元の世界では見られないような星空が見えたりなど、とても

のどかでいい場所だ。

そして、この世界のことだが……。正直まだわかりません。だって、仕方ないじゃん。俺まだ0歳なんだよ？

まあそのことは追々調べようかと思ってます。

まあそんなこんなで、色々と紹介をしてきたわけだが、赤ん坊としては、こんな長時間考え事をしているとなると、お腹が空く訳であって……。

赤ん坊がお腹が空くとなると、こうなってしまつのは生理的にしようがないわけであって……。

「おぢやあ！ おぢやあああ！……」

「あら。そろそろお昼の時間ね。じゃあレクサにご飯を挙げないと」

そう言って、母上は服をたくし上げる。

まあなんだ。赤ん坊のご飯と言ったら、アレしかないわけであって……。

それは排泄同様、どうしようもないのだが。

くそそう！ 早く大きくなりたい！！

皆さん、お久しぶりです。元気になりましたか？

僕は元気です。

ん？ もつすでに同じ挨拶をしてるって？

まあ気にするな。俺もアレから大きくなって、5歳になったんだ。

え？ 早すぎないかって？ 仕方ないだろう。そもそも、赤ん坊の頃の話をして、特に語ることもなんてないわけであって。決して、自分の黒歴史を語りたくないわけではないよ？

ホ、ホントだよ！？

まあアレから、色々あったので、皆さんに報告することがありますね。

まあ、まずは俺自身のことからかな。まず、簡単な文字が読み書

きができるようになりました！

……あれ？ 反応が薄い？！

いやいやいや！ この世界で文字がかかるようになるのってすごく大変なんだよ！

そもそも、普通の人は文字の読み書きが出来なくても暮らしていくには問題ないしね。

それに、言葉なんかは赤ん坊のころから聞いていたおかげか普通に話せるようにはなっただけで、文字ばかりは日本語のせいか覚えるのに時間がかかってしまったんだよね。

それでも、2歳である日常会話が完璧にできるようになって、3歳くらいには母上に頼んで、「ボク、ご本がひとりでもゆるようになりたいです」って言ったら、そりゃもう凄い勢いで喜んでくれたんだよ。

その成果が最近出てきて、簡単な書物だったら一人で読めるようになったんだ。

まあそう言っても、本自体が高価なものらしくて、父上の書齋に薬草や簡単な魔法の書物があるくらいなだけだね。

一応子供だからって理由で、まだ父上の書齋には入れてもらっていないんだけど、いつかあそこにある書物を読みたいなあ。

「レクサー。ご飯よー」

「はい。今きます」

母上に呼ばれて気がついたが、そう言えばもう昼時だしお腹もすいてきた。

居間へ向かうと、既に父上と母上は席についていた。俺の席が父上の隣の席で、母上は斜向いに座っている。

そして、俺の正面には……。

「はい。シャルちゃん。ごはんですよー」

はい。新しい家族が増えました。

妹のシャロン（3歳）。容姿は母親似で、青い髪を受け継いでおり、とても愛らしい。長い間（三年だけなのだが）妹のミコトに会えなかった俺としては、とても嬉しいことで、その愛情をたっぷり注いで育ててきた。最近ようやく言葉が話せるようになって来たのだが、一番初めに喋った言葉が「にーにー」だったことには、感激のあまり失神してしまうほどだった。

そう言えば、父上と母上はそれがとても悔しかったのか、その後必死に自分のことを呼ばせようとしていなあ。

ちよっと引っ込み思案な所があって、お客さんが来た時とかは俺

の後ろから出ようとしなほどだつた。兄としてはちよつと心配なところでもある。

「よし、じゃあ全員席についたな。じゃあ主に祈りを捧げよう」

父上がそう言つて、目を閉じて手を合わせた。

「神よ、あなたのいつくしみに感謝してこの食事を日々の糧として、いただきます」

「「「いただきます」」」

最近知つたのだが、この世界も宗教があり、その名も聖一神教会という。先ほどの祈りもそうなのだが、我が家も敬虔とまでは言わないが、信者である。

「シャルちゃん。ママのご飯はどうかなー？」

「……おいちい（おいしい）」

可愛すぎる！！ やだ、何この子！ 可愛いにも程があるんですけどー！！ ってか家に連れて帰りたいわあ、って、ここ自分家じゃん。

「んー、やっぱりシャルちゃん可愛い！」

ですよねー、母上。

さてと、今日の昼食はっつ……。うげ、グリーンピースもどきが入ってる。ここはそーっと端に寄せて……。

「レクサ。好き嫌いをしては大きくなれないぞ」

ちい！！ バレてたか、父上。

仕方ない、我慢して食べるしかないか。

「はい。あむ（もぐもぐ）。……（うげー）」

母上の料理自体嫌いじゃないけどなー。ただ、このグリーンピースもどきに関しては、前世でも苦手なものだったのにこっちの世界でも存在してるんだもんなー。

そうそう。こちらの食事情について軽く説明しておこう。

主に主食はパンで、それに肉や野菜などをメインに食べている。

先ほどからグリーンピースもどきと言っているが、味や見た目はそ

のままなのだが、名前だけ違っているらしく、説明がめんどうかいので、もどきと言っている。

また、食料に関しては、元の世界と変わらないようで、ほとんどの食材が見たことがあるものだった。

これなら、元の世界で培ってきた料理スキルも通じるのではないだろうか。まあまだ試す機会はないのだろうけどね。

「……ご馳走様でした」「……」

「……」

「ん？」

食事が終わると、シャルに声を掛けられた。

「きょうも、いっしょにあそぶ？」

普段は昼食が終わるとシャルと一緒に遊んでいる。まあ遊ぶと言っても俺が本を読み聞かせたり、お人形遊びを付き合ったりなどが。

しかし、今日に限ってはそうも行かない。

「今日は悪いけど、一緒に遊べないんだ。ちょっとやることがあるってな」

「え……」

やばい……！ シャルのやつ泣きそうになってる！ まずい、非常にまずいぞ。何とかしないと……！

「そ、そつだ。明日は絶対に遊んでやるから！ 絶対に」

「……うん。わかった……。やくそくだよ？」

なんとか納得してくれたけど、非常に気まずいな。でも、そろそろアレを試してみないといつまでたっても進展がないしな。

妹よ、すまない。この埋め合わせはきつと明日するからな。

シャルが寂しそうにしているが、後ろ髪をひかれる思いでこの場を後にした。

く第1話 新しい家族く（後書き）

2011/10/29 誤字修正

く第2話 能力を調べてみようく（前書き）

たった一日でPV1000も超えてくれる！

正直チキんな僕としては、もう嬉しいんですけど、皆さんの評価が怖くて怖くて（笑）

でも、見ていただけたことに感謝いたします！！

〜第2話 能力を調べてみよう〜

さて、ここまで来れば、大丈夫かな。

俺は家の裏山の麓辺りまで歩いてきた。家から徒歩10分くらいで着く場所だし（実際は五歳児の足だから30分もかかってしまったのだが）、この場所はなぜだか人が寄り付かないんだよね。

意外といい場所なんだけどなあ。緑は豊かだし、花畑もあっち側に見えるし。

今度、シャルのやつも連れてきてやろうかな。あいつ、きっと喜ぶだろうな！。

ふふふ……………っは！

いかん、いかん。雑念が。

そろそろ、自分の能力を確認しておこうと思ったのだが、万が一この事が誰かにばれてしまうと大変なことになってしまうしね。

んじゃ、はじめますか！。

まずはちゃんと能力が引き継がれているかを確認するべきなんだが…………、そもそもゲームのようにステータス画面のようなものが存在しないため、自分のステータスがまったくわからないのだ。

職業のスキルが使えるればある程度は推測できるかもしれないし、まずは職業が使えるかを確認するか。

おっと、ここでFTOの職業システムについて、簡単に説明しておこうかな。

FTOには職業系統が大きく分けると武器攻撃系職業、魔法攻撃系職業、回復系職業、生産系職業の4種類ある。

まず、武器攻撃系職業。基本職業に剣士ソードマンがあり、上位職に、攻撃特化の狂戦士バーサーカー、防御特化の騎士ナイト、回避特化の盗賊シフの3つがある。

次に、魔法攻撃系職業。基本職業に魔法使いマジシャン、上位職に、魔法使いの更に上位の魔法が使用できる魔術師ウィザード、召喚獣を従えて戦う召喚士サイモ、属性魔法が得意な祈祷師シャーマン。

回復系職業では、基本職業に僧侶クレリックがあり、上位職業では、職業最大の回復力を誇る神官プリースト、支援魔法を駆使して味方をサポートする吟遊詩人バード、気を纏って肉体を強化して、己の肉体を使って戦う武闘家モンク。

最後に、生産系職業では、基本職業に商人マーチャント。上位職に、武器を生産できる鍛冶屋ブラックスミス、巧妙な機器を作成することが可能な機工師マシーナリー、ポーションから魔石まで様々なものを生成することができる錬金術士アルケミストがある。

FTOでは、その4系統の中から、4つまで職業を選択することができる。勿論最初は基本職業しか選ぶことができないが、転職条件を満たすことで上位職に転職する事ができる。各職業には職業レベルが存在しており、職業スキルを使用していくとその職業レベル

が上がっていく仕様となっていた。

このシステムのおかげで、様々な職業をユーザーがキャラメイクをすることが可能となっている。通称、メイクリング職業創造。

例えば、武器攻撃職種である騎士ナイトと魔法の扱いに長けた魔術師ウィザードで魔法騎士マジックナイトに、回復職である神官プリーストと凶暴な力を奮って戦う狂戦士バーバリアーでは戦神官ウォープリーストとなり得る。はたまた、騎士ナイト、魔術師ウィザード、神官プリーストの三つで勇者なんていうこともできる。

勿論、システム上ではそのような名前が付けられているわけではないのだが、このようにキャラメイクが行えるとあって、FTOは人気があったのだ。

ちなみに、俺が使える職業は、魔法職から、召喚士サモナー、回復職からモンク武闘家、生産職からは、鍛冶屋ブラックスミスと錬金術士アルケミストの2つである。勿論、僕の職業も職業創造メイクリングをしてある。その説明は、次の機会まで取っておくことにしておこう。

じゃあまずは、召喚士たる召喚術をやってみますか。

ゲーム内ではさんざん使った術だけど、いざ実際に自分が発動するととなると……、うん、テンション上がってきた!!

召喚術とは、文字通り契約した召喚獣を魔法で呼び出し、使役して戦わせる術である。

ここで、召喚獣と契約について説明しておこうかと思う。

召喚獣とは、召喚術で使役する対象を指すものであり、魔力を持ったモノである。

つまり、それが物でも者でもなんでも構わないのだ。

次に契約についてだが、召喚獣と契約する方法は、大きく分けて2パターンある。

1つが、契約召喚で契約をかわすものだ。

この契約には、召喚したい対象の素体（体の一部や思いがこもったものなど）と魔力を消費して契約対象を強制的にこちら側に召喚して契約してしまうというものだ。

FTOでもこの方法が主流で簡単な召喚獣の素体は露店などで安く売られていたほどだ。

次に、契約する召喚獣と直接、魔術契約を交わすことである。

そもそも、魔力を持った対象が簡単に見つかるものではないのだが、契約召喚では契約することができない強力な召喚獣の契約に用いられる。（まあ大抵契約対象を討伐した報酬となるため、生半可な能力では契約できないのだが）

だが、俺自身、能力を継承した段階で契約も引き継がれているように、ゲーム時代に契約していた召喚獣が既に使えるようになっていたのだが。

んで、召喚術を使ってみようかと思うんだが……。色々いるけど強力なやつ喚んでも何かするわけでもないしな。無難にあいつでも喚んでみるか。

ふう。

.....

.....

やっべー！　なんか緊張してきた！

えっと、こつこつ時は深呼吸、しんこきゅつと。

吸ってー、吐いてー、すってー、はいてー、すて……。

ふう。

よし！　今度こそ呼び出すぞ。

.....

.....

.....

って、召喚術ってどうやるんだ!!!

致命的なこと忘れてたよ！ 俺、使い方なんて知ってるわけ無いじゃん！

なんとということだ.....。

序盤のまさかこんな場所で躓いてしまうなんて.....。

んー、FTOの時って俺どうしてたっけな？ 確か、スキルアイコンをクリックして.....、そしたらスペルウィンドウが出てくるから、それを唱えて.....あ、そっか。詠唱呪文が必要なのかな？
うんうん、魔法って言ったら呪文の詠唱だもんね！

んじゃ、気を取り直して再度挑戦だ！

場が静寂に包まれた。俺の周りに見えない力のようなものが集まっている気がする。

『我求む。貴人の指を赤く飾り、貧者の命を助き求むる者へと渡りながら、内なる声聴く主を探す赤き宝獣。召喚・カーバンクル！』

俺の詠唱が終わった途端、先程から体に集まっていた力が体外へ流れてた感覚が俺を支配した。

そして、次の瞬間。俺は閃光に包まれた。

キュウ

お……、おお！！ 出たー！！

俺の目の前に、頭部に赤い宝石が埋め込まれた、光る小動物がいた。んー、あれだな。見た目はリスに近いかな。でも、尻尾は先が尖って長く、さわり心地はとてもよさそうな感じだ。

「お……、お前はカーバンクル……だよな？」

キュイ！

カーバンクルが肯定の意を示すかのように、俺の問いかけに反応してくれた。

ただ、反応してると言っても、声を出して鳴くという感じではなく、頭の中に直接話しかけられている感覚だ。

なんか変わった感覚だなー。まあ召喚獣に対して、常識とか通じるわけないか。そもそも、俺自身非常識な存在なんだしな。

しっかし、なるほどねえ。召喚獣を出しているときも何か抜け抜けていく感覚があるし、恐らくこれが魔力ってやつなんだろうね。

従来、FTOでは召喚士は召喚獣を召喚しているときは、常に魔力を消費する仕様となっていた。

現に今、カーバンクルを召喚している際にも、俺自身の体から魔力がカーバンクル自体に流れて行ってる感覚がある。

恐らく、カーバンクルをこちらの世界にとどめておくために、俺自身の魔力を使っているのであろう。

OK、OK。

大体魔力に関しては、感覚が掴めてきたぞ。

これで、詠唱系のスキルは問題ないか。

本来はスペルウインドウに表示されているスペルを詠唱するのだけど、スペルの詠唱がうまくいかないスキルが発動しない使用だったおかげで、使用可能な詠唱呪文なんかは全部覚えちゃったんだよね。

とりあえず、魔力の消費量を調べたいし召喚しているカーバンクルには、そのまま居ていただいて……、次行ってみよう。

さて、あとは実際に体を動かす格闘系のスキルだな。

まずは武闘家モンクの基本スキルとなる『オーラ』だよな。

『オーラ』とは、使用することで術者の気を体に纏い肉体を強化する。これは、武闘家モンクの基本スキルにして、終盤でも使用される必須スキルとなる。

ちなみに、格闘系スキルの発動方法は、技名を叫んだ後発動モーションをとれば発動してくれる。

まあある程度のアシストはついてくれるので、そこまで発動モーション自体は難しくない。ただ、上級スキルとなっていくと、発動方法がそもそも難しくなったりもする。

ちなみに、『オーラ』の発動モーションは自然体で、全スキルの中でもっとも簡単に発動させることができる。

「よし、『オーラ』！」

おお！ 力がわいてくるな、これ。ゲームだった時だとわからなかったけど、まさに内側から力がわいてくる感覚。まるで自分の体が羽のように軽いし、今だったら一日中走り回っても汗ひとつかかないかもしれないぞ。

まあ効果自体は10分ほどしか持たなかったはずだけだね。

じゃあ次は『烈風拳』をだな。

この技は、名前こそカッコいいかも知れないが、要は風を斬る程の正拳突きである。

威力は正拳突きのスピードから出る衝撃波でそこそこあるわけだが、それでも初級スキルの位置となるのでそこまでは強くないはずだ。

「ふう、……『烈風拳』！！」

ゴウ！！

正面の岩へ放たれた拳は、前の岩めがけて衝撃波が発生した。

ここまでは、スキルの発動だし予想通りの結果だ。

ただし、ここから先は流石の俺もまったく予想だにしていなかった。

なぜなら……、正面にあった岩の中心がきれいさっぱりにくりぬ

かかってしまったのだ。

……は！？

いやいやいや！！ おかしいでしょ！ 岩が砕けるとかくらいだったら俺も予想してましたよ！ 何せ、ゲーム時代の能力を引き継いでいるんだっつらね。でも、それを通り越して岩が、たかが五歳児の正拳突きくりぬかれちゃうとか。

……。

コマカイコトハキニシナイ。

ま、まあもしかしたらこれがこの世界の常識かも知れないしな！

……ちなみにだが、一応全技は使ったことがあるので発動モードは覚えておいてから、使おうと思えば上級スキルも使えるはずだ。だが、そもそもそんな上級スキルが必要になるほどの相手もこの辺りにはいないと思うし、先程のスキルの威力を見たら、流石に大技を使用するのめためらわれてしまう。

それらに関しては追々で構わないだろ。

魔法も使えだし、格闘スキルも使えだし、戦闘に関しては問題ないはずだ。

各上級スキルが使用できるかが、まだわからないのだけど、流石にあまり派手なことをしてしまうとこれだけ離れていても誰かに見

つかってしまおうしな。

今日はここまでにしておくべきかな。シャルのやつも心配してる
だろうしなー。

あー、今日遊んでやんなかったからいじけてるかもしれないよ。
そうだ！ 花でも摘んで帰ってやれば少しは喜んでくれるかもし
れないぞ。

そうと決まれば、早速……。

ガサッ

「ん？」

↳ 第2話 能力を調べてみよう (後書き)

2011/10/19 技名の修正

〜第3話 初めての戦闘〜

ガサッ

「ん？」

近くの茂みから何かが動くような音が聞こえてきた。

誰かやってきたのだろうか？ いや、そもそもこんな場所に何のようだ？

ここなら誰も来ないと思って、わざわざここまでやってきたわけだし……。

「だ、だれかいるの？」

俺は徐に音がしたほうへと声をかけた。しかし、反応がまったくない。気のせいだったのだろうか？ 俺は辺りを注意深く見渡してみた。が、やはり誰もいない。

おかしいなあ。確かに音が聞こえた気がしたのだが……。

気のせいだと思い気を取り直して、花を摘みに行こうとした、その時。

ガサガサッ

「っ！」

やはり茂みになにかいる！！ どこだ！？

再び俺は辺りを見回す。

そこへ、茂みの中から一筋の矢が俺を目掛けて飛来してきた。

「くっ！！！」

間一髪のところまで飛んできた矢を掴むことができた。

普段の俺だと恐らく回避すらすることが出来なかっただろうが、先ほど使用していた『オーラ』のお陰で難を逃れることができた。しかし、これだけでは終わらなかったようだ。

「ギギッ！！！」

茂みから飛び出してきたのは、武装したウサギのような動物だ。いや、待てよ。これはどこかで見たことがあるぞ。

アレは……、FTOに出てくるウサギ型の魔物に似ているような。

そうだ！ ラピッドレンジャーとラピッドソルジャーだ！！

って、似ているというか、それそのものじゃないのか！？

けど、なんでだ！？ 確かに自称神には能力を引き継いで転生させてくれとは頼んだが、なぜFTOに出てくるモンスターが居るんだ！？

俺の周りを取り囲む敵の数は、およそ15体。敵の強さは決して高くはないのだが、流石にこの数だ。

何より、ラビット系の厄介な所は、その統率力にある。1体づつであれば簡単に倒せるレベルなのだが、周囲との連携がうまくとれていて、厄介極まりない。

1人で相手をするのは少々骨が折れるかもしれない。

いやいや、それどころじゃないだろ！ とりあえず、攻撃してき たつてことは、敵対しているってことだし、なんとかして倒さないと。

ゲームだった時は、死んでもリスポーン地点で復活することができたのだけど、流石に現実の世界だ。そんな都合の良いことはないだろうな。

さて、んじゃちょうど力試しにやらして頂きます！！

『エナジーバレット!』

魔力の弾がラピッドソルジャーに当たる。これは、魔法系職業の基本職である魔法使い マジシャン の初級スキルだ。

コストも小さく、牽制として使いやすい。

先の攻撃を受けたラピッドソルジャーが、俺に向かって突進してくる。

そして、装備している剣を振りかざして、俺に攻撃を仕掛けてきた。

俺は、その攻撃を紙一重で受け流し、敵の背後へ回る。

「これで……、終わりだ!」

俺の拳から放たれた攻撃が最後のラピッドソルジャーを貫いた。

「ギー……!」

「はあ……、はあ……」

最後のラピッドソルジャーが消滅したことで、辺りが静寂へと包まれた。

流石に複数の敵を相手にしたせいか、疲労で体中が悲鳴を上げている。

つく……。流石に5歳児の体だと、長時間の戦闘どころかこいつら程度ですらままならないようだな。

けど、おかげで色々な情報を知りえることが出来たな。

まず、この体だが確かにスキルの補正等あってか、そこらの5歳児以上の力を発揮することが出来るようだ。

しかし、されど5歳児。体が出来ていないせいで、動きに体がついてこない。

つまり、格闘系のスキルを使用するためには、もっと自身の肉体を鍛える必要がある。

まあその点に関しては、時間があることだし、これからの課題として鍛えていこう。

逆に魔法関連に関してだが、こちらは魔力操作に慣れてしまえば、そこらの魔法使いとは遜色ないレベルで使うことが出来そうだ。

また、魔力に関してはかなりの魔力を有していることが分かった。戦闘中も先程召喚したカーバンクルを脇に待機させて召喚を維持していたし、初級スキルではあるが魔法使いのスキルもかなり使用することができた。

つまり、カーバンクル程度であれば、戦闘中に魔法系のスキルを使用しながら召喚を維持し続けていても問題がない訳だ。

勿論、俺が契約している召喚獣の中では、一番コストが低く、能

力もそこまで高くはない。

ただし、カーバングルのいいところは物理、魔法共に防御面に優れているところで、指定した対象を常に守り続けることが出来る。

そうとわかれば、今後の課題が見えてくる。

まず、当面は体を鍛える事。

次に、使用可能なスキル（これは今日確認しなかった生産系も含まれる）、魔法の調査と素材集め。

それと、この世界についての情報集め。

最後に、召喚魔法の研究だ。

やはり、戦闘面では体を鍛えておいて損はない。むしろ、魔法使用の撃たれ弱さをカバー出来るわけだし、これは優先度としても高い。

それに、自分が使用出来るスキル調査も欠かせない。何せ、ゲーム時代と違い、これは現実の世界だ。

自分が使えるスキルや魔法の特性を調べれば、新たな可能性が見えてくるかもしれない。

また、やはりこの世界で暮らしていくならば、お金が必要になってくるだろう。

そのためにも、自分が何を出来るのか。そして、どのような素材が存在しているかななどは調べねばいけないだろう。

さらに、この世界について。これは、先程流してしまったが、なぜFTOのモンスターがこの世界に居るのか。

これは、もしかしたら他にもFTOと酷似していることがあるか

もしれない。

まあ時間がかかるだろうが、きっと調べておいて困ることはないだろうしね。

そして、最後の召喚魔法の研究は、俺の究極の目的の一つだし、やらないわけにはいかない。

むしろ、これが転生した目的の一つなのだから。

さー、やることが見えてきたなー。やることは山ほどあるわけだが、時間もまだまだ沢山ある。

これから忙しくなるだろうけど、頑張っていけますかー。

ガサッ

「ん？」

あれ？　もしかして、敵がまだ残っていたのか？

先ほどとは逆の茂みの中から現れたのは……シャルだった。

「にーに……」

「っ！ シャル、お前なんでこんなところに……！」

ま、まずい！

先程の戦闘を見られていたか！？

いくら敵がらビッドソルジャー達だと言っても、本来なら五歳児がかなう相手ではない。

これが、他の人間にばれてしまったら、俺の計画が狂ってしまう。

ここは何とかして誤魔化さなければ！

「シャル。お前いつからそこにいた？」

俺は、普段シャルに見せているような優しい声をかける事さえ忘れるほど動揺してしまった。

シャルは、驚いているのか俺の問いかけに恐る恐るといった具合で答えた。

「えっと……、にーにいが、うさぎさんたちとケンカしてるところから……」

つく！

完全に戦闘している姿を見られてしまっていた。

これでは、言い訳のしようがない。

もし、これが戦闘が終わった直後であれば、とぼけることもできただろうが。

ヤバい！ ヤバすぎる！！

このままでは、妹に嫌われてしまう！！！！

な、なんとか誤魔化すなりなんなりしないと。

「あー……、えーつと……。これは「にーにい……、とつてもかっこよかった……」だな……って、え？」

シャルはあどけない笑顔で俺にそう言った。

「え？ あれ！？ 怖くないのか！？」

「……？ なんで？」

シャルはそう言うと、俺の方へとトテトテと歩いてきて、抱きついてきた。

それがさも当然のように。

あるええええええ？？

俺は訳もわからず、さらに混乱してしまった。

いや、まあ怖がっていないのは別にかまわないうつていうか、むしろ都合がいい訳なんだけど。

でも、普通五歳児がこんなはちゃめちやな力を振り回してたら、怖がって当然な気がするのだが。

……………。

ま、まあこれも愛のなせる技かな！（主に俺の）

俺は、抱きついていているシャルの頭を撫でながら、今後の事を考えていた。

とりあえずはシャルに能力の事がばれてしまったわけだが、シャルに黙ってもらうことにして何とか隠し通すべきだよな。

流石に、周りの大人たちは気味悪がるだろうし、何しろ両親にはバレて欲しくはない。

もしかしたら両親も受け入れてくれるかもしれないが、普通だったら気味悪がつて最悪親子の縁を切られてしまう可能性も否定できない。

「シャル。この事なんだけど、他の人には内緒にしてくれないか？」

「……………なんで？」

「え？」

あー。まあ普通は疑問に思うよな。

どうするかな。なんとか誤魔化さないと。

「……ほら、あれだよ。……特訓してるのがバレたら恥ずかしいだろ?」

シャルの疑問に思わずウソをついてしまったが、まああながち間違ではないわけだしいいだろう。

「……うん。わかった。じゃあやくそくだね」

俺のいい訳納得してくれたのか満面の笑顔で答えてくれた。

うおお！ その笑顔がまぶしすぎる！ 俺のやましい心をグサグサ抉ってくる。

でも仕方ない。俺もこの家族を失いたくはないし、やることは山ほどある。

こんなところで立ち止まっている訳にはいかないのだから。

「よし。じゃあお花を摘んでからおうちに帰ろうっか」

「……うん!」

こうして、シャルと二人で花を摘んで家路へとついた。

ちなみに次の日。

俺は技の使い過ぎで筋肉痛でベットから起き上がれなくなってしまった。

両親は心配してくれたが、シャルのやつは拗ねてしまって、1週

間は口をきいてくれなくなった。

……じわああん……!!

〜第3話 初めての戦闘〜（後書き）

更新が遅くなってしまいました。

ほぼ毎日のように更新している人は、なんなのでしょう？
神ですか！？

初めて戦闘シーンを書きましたが、とても難しいです。

戦闘シーンが勉強になる小説とかあったら是非教えてください！

〜第4話 日常〜

「でや！」

俺の拳から放たれた拳撃がクイーンラビットを貫いた。

「ギギイー！」

崩れ去るクイーンラビットを傍らに、残りの数体のラビッドナイトが守護すべき対象であるクイーンを倒されたことに激怒して俺目掛けて剣で斬りつけてくる。

迫り来る無数の剣撃をバックステップですべて回避し、残りのラビットに対して俺は一気に攻撃を仕掛ける。

『濁流脚！』

濁流脚とは、武闘家モンクの中位技に位置し、複数の敵を蹴り倒す技である。その様がまるで濁流のようなことからこの技名が付けられたとか。

発動モーションが少し複雑で、ダッシュからの回し蹴りでスキルが発動するため、慣れるまでは少々当てづらかったりする。

まるで、濁流の音のような大きな音が鳴り響き、放たれた技が複数の敵を飲み込み、無情にも敵は為す術もなく消え去っていく。

「ふう……。かなり技の発動にも慣れてきたな」

俺は周囲に敵が残っていないかを確認しながら、慣れた手つきで消え残っているモンスターの魔素材をはぎ取ることにした。

ちなみに、先ほどの魔物たちは、クイーンラビットとラビッドナイトって言う魔物で、以前戦ったラビットソルジャー、ラビットレンジャーと同じ種族になる。

ラビットソルジャーはウサギ型の魔物で、剣を持って戦うことができ、この種族の中では一番ポピュラーなタイプの魔物だ。

ラビットレンジャーは弓を使うことができずばしっこいし、ラビットナイト頑丈な鎧と盾を持った騎士タイプで、クイーンの近衛的な存在として常に守っている。

クイーンラビットは群れに1匹しかいない珍しいタイプで、クイーンラビットが居る群れは統率がとれて、ラピッド系の能力が上昇するためかなり厄介なやつだ。

このタイプの魔物を見た目は可愛いが、恐るべき点は様々なタイプが存在して、その統率のとれた連携にはゲームの序盤ではかなりの強敵となったりする。

「お、毛皮が手に入ったか。これでレザー装備が作れるかな」

慣れた手つきで敵から魔素材を剥ぎとった俺は、そのままインベントリの中へ放り込んだ。

そうそう。初めての戦闘から早三年。

僕も8歳になったんだ。

あれから、この世界のこととか自分のこととか色々分ったから、みんなに報告しようと思う。

まず、この世界について。

この世界はどうかやらFTOにとても似ているらしい。

まず、僕らが暮らしている大陸の名前はメルヒエン大陸。そして、僕らの村があるところは、アイソーポス王国の領土になるらしくて、名前はクラダ村って言うらしい。

村の事は以前説明したから省くけど、メルヒエン、アイソーポスに関してだけ、どちらもあるその名前はFTOにも出てきていたんだ。ただ、規模がちよっと違って、FTOではメルヒエンは世界の名前、アイソーポスが大陸の名前だったんだけど。

それに、冒険者っていう職業があって、その中の職業も分っている限りでは一緒だったし、モンスターに限っても見た限りでは同じだったよ。

まあこれだけFTOの設定と類似しているのであれば、もしかしたらゲーム時代に培った知識も役立つかもしれないね。

勿論、これは既に現実の世界のことなんだから過信は出来ないけどね。

次に、先程魔素材だったりインベントリだったり知らない単語が出てきたと思う。

魔素材とはいわゆるドロップアイテムのことだ。敵や魔力のこもった自然物などから取得出来るもの、この世界ではそう呼んでいるらしい。

(ちなみに、魔力のこもっていないものは普通に素材っていう)

初めの頃は、敵から魔素材を取得するなんて考える暇はなかったのだけど、戦闘訓練としてラビッド達と戦っているときに消え残る魔物がある事に気が付いたんだ。

本来、魔物とは魔力を宿す生物を指し、魔物を倒すと構成されていた魔力が崩壊して、魔物は粒子となつて消え去ってしまう。

しかし、稀に倒されてもその構成魔力が崩壊しない敵がいた。これに関しては、両親にそれとなく聞いてみたのだけど、どのような法則でそうなっているかは未だにわからないらしい。

その敵から魔素材をはぎ剥ぎ取り、それを元に道具を作成すると強力な道具を作ることが出来る。

しかし、俺は両親に内緒でこの場所で魔物狩りをしている訳だから、そんな魔素材を家に持って帰ってくる方がおかしい。

それが原因で魔物狩りや能力がばれてしまうのは元も子もない。でも、折角手に入れた魔素材がそのまだと非常にもつたない。

なので、どうにかならないかと悩んでいるときに偶然見つけたのがインベントリだ。

これも僕自身正直どういった原理で出来るのかは不明なのだが、俺が手に持った物をどこかに保存することが出来るのだ。

ゲームのインベントリみたいにアイテムをしまえることから、僕はそう呼んでいる。

しかも、入れたものは入れた時の状態が保たれているらしく、以前お昼のオムレットとパンをインベントリに入れていたことがあったのだが、食べる時に取り出してみると作りたてのものだった。

ただし、入れておける量には制限があるらしく、制限を超えてしまつと動けなくなってしまうようなのだ。

そのせいで、戦闘中に調子に乗って色々アイテムを拾いまくっていたら、動けなくなって敵にタコ殴りにされたのは今ではいい思い出だね。

なので、最近では要らないものは極力拾わないようにしているけど、それでもこのイベントりは重宝している。

あ、そうそう。

初めての戦闘から3年もたった僕だけど、あれからずっと腕立て伏せだったり、走り込みだったり、思いつくトレーニングは色々やって来たんだ。

そのおかげで、体力がかなり付いた。戦闘時に技を使っても次の日筋肉痛で動けなくなるなんて事はなくなっただよ。

ほんと初めての戦闘の後は大変だったよ。

シャルのやつ、1週間も口をきいてくれなかったんだぞ。

可愛い妹にこんな仕打ちを受けるとは！

正直、拷問の何物でもなかったよ。

まあ仲直りをする為に、色々頑張ったよ。

当然、愛妹と仲直りをする為なら苦労は惜しまないからね、僕は！

「さて、そろそろ帰らないとシャルがいじけちゃうかな」

俺はいい訳用の山菜とシャルのお土産の花を手に、家路へとついた。

「母上。只今帰りました」

「あら、お帰りなさい。山菜はたくさんとれたかしら？」

そう言っつて、ちょうど夕食の準備をしていた母上は俺を迎え入れてくれた。

「いつも通りですよ。母上」

母上にお土産の山菜を渡して家の中に入る。

「あらあらー。今日もたくさんねえ。いつも助かるわ」

なんで山菜かって言っつと、いつも出かけている理由として山菜を取っつてくるって言っつて出かけてるからなんだ。

鍛錬に費やす時間が時間がそれに少し取られてしまっつけども、流石に理由がないと怪しまれちゃっつし仕方ない。

「にーにい……。おかえり」

トテトテと部屋の奥からシャルが現れて、抱きついてきた。

つくー!! 可愛い奴め!!

食べてしまいたいくらいだ!!

………っは!!

こ、これでは両親と同類になってしまうではないか。
あぶない、あぶない。

「にーにい、シャルには？」

「ん？ ああ勿論シャルにもお土産はあるよ。ほら」

そう言って、シャルに先ほどの場所で摘んできた花を渡した。

「わあ………！ きれい」

シャルは花を見つめながら嬉しそうに喜んでくれた。

いつも思うんだが、毎回花でいいのだろうか？ まあ喜んでくれるみたいだからそれで構わないんだが。

でも、今度はまた違った物でも持って帰ってくるかな。

「にーにい……。ありがとう」

シャルが嬉しそうに花を見つめている姿に、俺は心が癒された。

「あらあら。よかったわねえ、シャルちゃん。綺麗なお花さんを貰えて。じゃあテーブルの花瓶に飾りましょうか」

そう言って、母上は戸棚にあった花瓶を持ってきて、シャルに渡す。

「うん」

シャルは嬉しそうに花を挿した花瓶を両手に抱えて、再びトテテと部屋に戻っていった。

「じゃあお夕飯にしましょうね。レクサは手を洗ってきなさい。あと、お父さんいつもの場所に居ると思うから呼んできて呼んできてちょうだい」

「はい」

そう言って、俺は家の裏にある井戸まで駆けていった。

この井戸もこの世界に生を受けて使うようになってから、既に数年ほど立った。最初は自分の力では持ちあげられなくてとても苦勞した覚えがあるなあ。

いやあ成長したね、俺。

うん。変な感傷に浸っていないでさっさと父上を呼びに行こう。

「ふむ。ポーションの濃度が高すぎるな……。これだと、過剰回復してしまって逆に体力を奪うことになりかねん……。 (ブツブツ) 」

父上ことジョセフは乱雑に本が積み重なっていたり、実験器具と思われるガラスの管や薬草らしきものが散らばった部屋に籠って朝から薬品の調合に打ち込んでいた。

ここは家の隣にある建物で、父上の診療所兼研究所兼薬剤室として使われている。

父上は村の診療をやりながら、仕事の合間に薬師として様々な調合法を研究していたりもする。

また、父上は昔、冒険者として各地を母上と一緒に旅をしていたらしい。

それもあつてか魔法が使える、噂ではそこそこの冒険者だったとか
なんか。

まあ実際に本人の口から聞いたわけではないので、その辺りは定かではないのだけでも。

「父上。夕飯の準備が出来ました」

「こいつを入れてみてはどうだろうか……？ いや、しかしこれでは効果が反発しあつて今度は回復量が足りないか……（ブツブツ）」

うわあ。また研究モードに入っちゃってるよ。

こうなったら、ちょっとやそつとの事では気がついてくれないだろうな……。

まあ個人的にはこうやって研究に没頭する父上の姿は格好良いと思うし、好きなんだけど今回はかりは大変そうだな。

「父上！ 夕飯の準備が出来ました！！」

「だとするとこれを使用してみるか？ いや、でも確かにこれを使うと効果は安定するが、価格が高すぎるから今度は安定供給が……（ブツブツ）」

案の定気が付かないよ、この人。

……このまま放おつておいくか？

いや、それはそれで、母上が怒りそうで怖い。

うーん、でも流石に薬品使ってる場所だから近くに行って驚かせたりしても危ないだろうし……。

うん。メンドクサイ。

こっとなったらアレか……。

俺は一度この場を後にして、家に戻った。

家に戻るとリビングのテーブルの上に先ほど持って帰ってきた花を眺めているシャルを連れて、再び先ほどの場所まで戻ってきた。

「いいか、シャル。さっき伝えた事をそのまま父上に対して言うんだぞ？」

「うん。……わかった」

俺は、こちらに来る際に、父上をこっちの世界に戻すためにとっておきの言葉を伝えておいたんだ。

「よし、じゃあ頼む」

「父上なんて大っキライ（ボソツ）……」

ドンガラガツシャーん！！！！！！

うん、効果は抜群だ。

「シャ、シャル！ ど、どうしたんだ！ 父が何かやってしまったのか！？ 反抗期なのか！！？」

いや、正直慌てすぎだろ！ ってツツコミがどこからか飛んでくるかもしれない。

だがしかし！ 年頃の娘を持つ親バカな父上には、これがとてつもなく効くんだ。

それこそ、集中力が高まっている研究モードになっていようと耳に入ってくるようだし。

まあ正直俺が言われても、同じような反応を示すだろうけどね。

うん。遺伝って怖いな。

「父上。落ち着いてください。シャルもそこまで嫌いではないはずよ」

「そこまでってどこまでだ！？ やはり嫌われてしまったのか！！？」

あー、ちょっとメンドクサイ事になったかも。自分でやっておいてなんだが、ちょっと後悔。

「（シャル、さっき教えたように言っちゃってくれ）」

シャルはわかったと頷き、父上に言い放った。

「……ゴハンできました。食べに来てくれたらキライになりません……」

「そ、そうかそうか！　じゃあ早速食べに行こう！！　すぐ行こう……」

そう行って、父上はシャルを抱えて猛ダッシュで家の方へと戻っていった。

……父上。キャラ変わりすぎです。

〜第4話 日常〜（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません!!

仕事が忙しくて更新できませんでした：orz

はい、いい訳ですよ。すみません（T T）

定期的の更新を頑張って目指しますので（出来れば週一で）よろし
かければこれからも見てやってください。

〜第5話 日常の終わり〜

「「「「」馳走様でした」「」」

夕食を食べ終え、俺はいつものように片づけの手伝いをする。

「では母上。僕は裏の井戸から食器を洗う用の水を汲んできます」

そう言って、俺は席を立つ。

「シャルもおてつだい、します」

シャルもいつものように、俺に付いてくる。

「では、私はちょっと村長のところへ行つて来るよ。仕事が終わったら来てくれないかと言われていたからね」

そう言い残して、父上は村長の家まで出かけていった。

「じゃあ僕達も行くかうか」

「はい」

俺たちは母上が残りの食器たちを片付けづけている横を通って、井戸へ水を汲みにゆく。

「きょうは、シャルがお水くみたいです」

井戸へ着いたシャルが水を汲みたいと言ってきた。

ただ…、正直五歳児力じゃ井戸の水を汲み上げるのは厳しい気がする。

「んー、でもシャルじゃあちよつと厳しいんじゃないのかな？ 水は僕が汲むから、家まで一緒に持っていくことにしないかい？」

俺はシャルが駄々をこねないように、やんわりと諭した。

「ダメ…ですか…？」

シャルは潤んだ目で俺を見つめている。

それはもう悲しそうな目付きで、俺に訴えかける。

ま、マズイ。これは泣き出してしまっ。

……

「じゃ、じゃあシャルが頑張って水を汲んでみるか？」

「…はい！」

そんなシャルは俺に満面の笑みを俺に向けてくれる。

うわー。この嬉しそうな顔！

やばい！ 俺の顔がニヤけちゃう！！

そして、俺の意思が弱すぎるだろ思ったそこの諸君！
君たちもいずれはわかる日が来るだろう。

「よ、よし。じゃあ俺はシャルが水を汲むのを全力で応援してるよ！」

「シャル…がんばります…！」

シャルが井戸の水を汲むために桶をとって井戸に投げ入れた。

桶が井戸の下まで届いた音が響く。

「では、いきます…！」

シャルが頑張って縄を引っ張る！…が、当然の如く縄はビクともしない。

「うん……しょ……」

ああ！ やっぱりシャルには厳しかったのか……。でも、シャルが頑張るって言うてるんだし、ここはシャルの自主性を重んじるべきだろうか……。

「うん……。あ……」

バシャーン！

シャルの力では無理があつたのだ。手から力が抜けてしまい、桶が無情にも井戸のそこまで落ちてしまった。

「あう………」

シャルがまた目に涙を貯めて、今にも泣き出しそうにしている。

……うん、駄目だ。

我慢出来ない！

でも、下手に手を出して、嫌われたくない！

じゃあこっそり手伝おう！

つてなわけで……

『（我求、寒き地に住まう森の小さな小人。我の隣人を助け給え。召喚・コロポックル！！）』

「ポー！」

「（しー！コロポックル、静かにして！）」

「（ポー！）」

目の前に露の茎を持った民族衣装のようなものを着た可愛い小人が現れた。

こいつは、コルポツクルっていう精霊だ。

まあ今回は能力よりも、その背丈が必要だったから呼んだんだけどね。

「（コルポツクル。今回はお前にしか頼めないことなんだ）」

「（ポー？）」

コルポツクルは不思議そうに顔を傾げた。

「（頼みと言うのは。シャルが井戸の水を汲むのをこっそり手伝って欲しいんだ。井戸の中から縄を引いて）」

「（ポー！）」

任せとけ！ という具合にコルポツクルが頷いた。

意気揚々としたコルポツクルはシャルに気がつかないように、井戸の上によじ登った。

「シャル。頑張るんだ！ お前ならきつと出来るはずだ！」

俺はシャルに声援をかける。

「にーにい……。うん、シャルがんばる！」

シャルがこちらを向いている隙に、コロポックルが井戸の中へ入っていく。

俺の声援で再びシャルは縄を持って井戸から水を汲み始めた。

「うん……しょ……」

シャルが頑張って縄を引いてる。すると、今度は次第に桶が上がってくる。

「あとちよつとだ！ 頑張るんだ！」

シャルに声援を送って励ます。

「うん……しょ……」

最後のひと踏ん張りで、なんとかシャルは桶の水を汲み上げる事ができた！

「やったー！！ 凄いぞ、シャル！！ やれば出来る子だ！」

俺は歓喜のあまり思わずシャルに抱きついてしまった。シャルも嬉しそうに俺を受け入れてくれる。

いやー。流石シャルだな！ やれば出来る子、頑張る子だ。

うん、うん。

……って俺、なにしてるんだらう？

ふう。久々に熱くなってしまった。

まあ仕方ないね。シャルが頑張ったんだからね。

ふと、急に冷静になって、自分の行動を思い返して見ると、なぜだかちょっと虚しくなってしまうた。

「さて、じゃあ一緒に家に水を持って行こうな」

「はい！」

俺たちは家に水を持って帰ろうとした、その時。

ガサッ

「ん？」

「た、助け……て……」

俺は声のする方に振り返った。

すると、井戸の後ろの茂みから見知らぬ人が出てきた。

その人は力尽きたかのように、俺たちの目の前に倒れこむ。どうやら怪我をしているようで、暗がりで見ただけでも大変な大怪我に見えた。

俺は少しの時間、目の前に起こっていることが理解できずに固まっ
つてしまっていた。

「っ！」

まずい！ こんな事をしている場合ではない！ 急いで治療をしないと、これは命に関わるかもしれない！

「シャル！ お前は母上に急患だと伝えて、父上を呼んできてくれないか？ 恐らく一刻を争う事になりそうだからね」

「……はい！ 分かりました」

俺はシャルに手短に、父上を呼ぶように言うと、シャルはひとつ返事で父上を呼びに走りだした。

走りさってゆくシャルを見送ることも出来ず、俺はすぐさま怪我をした人の元へ駆け寄った。

しかし、どうするかなー。俺もここに転生してからは、まだ数回しか怪我をしたことがなくて、どのレベルの怪我が命に関わるかわからないしな。

とりあえず、ちょっと失礼して、怪我を見せてもらおう。

そう思い、俺は血の染みこんだローブを脱がす。ローブの下から現れたのは、どうやら女性のようだった。

傷口は背中を大きく引き裂いたかのように開いており、そこから流れでてしまっている血の量も恐らく半端ではない。

こ、これは、かなりマズイ気がする。

恐らく父上がここに来る前に力尽きてしまいかもしれない。

自分自身の力があれば、恐らく応急処置程度は出来るだろう。

しかし、それは引き換えに、俺の能力がバレてしまう危険性をはらんでいる。

そうなってしまったら、ここにはいられなくなってしまう。

あー。っていつか、目の前で人が死ぬかもしれないとか、寝覚め悪いじゃん！

…仕方ない。…仕方ないことなんだよ!!

俺は、未だに悩んでいる自分自身を無理やり言い聞かせて、彼女の治療を行う。

『光よ。彼の者に、安らぎと癒しの力を。 ヒールライト!』

俺が呪文を唱えると、彼女の傷跡を暖かな光が照らし始めた。

すると、見る見るうちに光があたった場所の傷が塞がってゆく。

これは、僧侶クレリックが覚える初級スキルで、ゲームでは小回復の効果があつたスキルだ。

こちらの世界では、どうも小回復というか外傷のみに効果がある呪文として広まっているらしいのだが。

よし。これで、恐らくは大丈夫だろう。

ただし、血の付いたロープを見るかぎり、血が既に乾いている場所もある。

恐らく、怪我を負ってから相当な時間、彷徨っていたのだろう。

体力が落ちてしまっている、今は傷が塞がったとしても、安全とは言いいられないわけだが……。

「レクサー!!」

そんなことを考えていたら、父上が走ってこちらに向かってきているのが見えた。

「父上！ こっちです！」

父上に居場所を伝えると、俺は肩の荷が降りた気持ちになった。

なにせ、父上はこの村屈指の薬師だ。

しかも、傷が既にふさがっているのであれば、後は薬などで体力を底上げするなどをしてくれるだろう。

「患者はこの人ね」

父上の後を追っていた母上も到着した。

「うむ。これはかなり衰弱してしまっているな。このままでは命に関わるかもしれない。エリナ。急いで僕の研究室まで運ぶんだ」

「ええ。そうね」

そう言つと、母上は一人で彼女を担いで研究室まで運んでいった。

母上すげー。なにげに一人で持ちあげるとかやってのけちゃってる。

「しかし……。服に付着している、血の具合から相当の怪我を負っていると思つたのだが、そこまで大きな傷がなかったのだが……」

ま、まずい！ 父上が不審に思つてしまつている。これは話を逸らしてしまわないと、色々とマズイことになる……。

「ち、父上。そんなことよりも、患者の方を放つておいてはマズイのではないでしょうか！」

「ん？ あ、ああ。確かに、患者は大きな傷がないとしても、衰弱しているわけだったしな。すまないな、レクサ。すぐに研究室へ向かうか」

そう行つて、父上は研究室の方へ走りだした。

ふう。なんとか話題を逸らすことができたな。危なかつたぜ。

と、思つたのもつかの間。父上が緊急停止をして、こちらを振り返る。

「つと。そうだった。レクサ！」

「は、はい！！」

俺は思わず声が上がってしまった。

「すまないが、水を汲んで研究室まで運んでくれないか？ 恐らく、大量のお湯が必要になるとおもうのでな」

「わ、分かりました。父上！」

「うむ。頼んだぞ」

そう言って、父上は再び研究室に向かって走りだした。

アレから、俺は井戸の水をシャルも一緒にやると言い出したので、一緒に研究室まで運ぶことにした。

まあ流石に今回ばかりは、人命がかかっていることもあり、俺が井戸の水を汲んで一緒にシャルと運ぶことにしたよ。

それで、大量のお湯を沸かした所で、シャルが船を漕ぎ始めてしまったので、父上たちに言われて俺たちは就寝することにした。

父上たちは、明け方まで患者の容態を見ていたのだが、安定したということもあって、今は交代で看病をしている。

「母上。彼女はもう大丈夫なの？」

ちょうど交代して、朝食を作りに戻ってきた母上に、俺は問いかけてみた。

「うーん。まあ怪我自体は大したことがないみたいだから大丈夫よ。今はジヨゼの薬を処方して様子を見ているところなの」

母上の口から大丈夫そうという言葉が聞けて、俺もやっと一安心することができた。

「まあジヨゼが「なんで、この出血量で怪我が大したことがないんだ？」なんてボヤいてたのよね」
「ブツ!!」

思わず吹いてしまった。

「な、なんでなんだろうねー？」

動揺しすぎではないのか？ 俺よ……。

俺があたふた動揺している、とその時。

バターン!!

家の扉が勢い良く開かれた。

「エリナ！ 彼女の意識が戻ったぞ！」

父上が勢い良く家の中に入ってきた。慌てた父上が母上の手を握って家を飛び出してしまった。

「ちょ、ちょっと！」

ってどうか、なんか慌て過ぎではないのだろうか？

まあ俺も急いで向かってみるか！

〜第5話 日常の終わり〜（後書き）

最終更新から約1ヶ月も更新していませんでした。

大変申し訳ございません！！

正直半分が勢いで書いた小説でしたので、話の続きを書くこと
がとても大変でした……

頑張って更新をしていきたいと思えますので、最後まで見捨てずお
付き合いたいだけならば嬉しいです。（ちゃんと最後まで更新が遅く
なったとしても書き上げたいと思います）

く第6話 日常の終わり(2)く(前書き)

相変わらず、執筆が遅くて申し訳ございません。

ネタはあるんですが、うまくまとまらないのと、作者の表現力の無
さにうまく執筆が進みませんorz

表現力もっと高めたいな。。。

く第6話 日常の終わり(2)く

タッタッタッタ

俺は家から診療所まで駆けつけて向かった。

診療所に行くと、既に父上と母上は彼女と話をしていた。

ただ、なんだか室内が凄じい重苦しい雰囲気だったので、俺はちょっと入りたくても入れないで、診療所の前でオロオロしていた。

「では、あなたが襲われたのはこの村の近くで間違いないでしょうか？」

「ええ、そうね。恐らく一番近い村はここになるでしょうね」

「なるほど。ではやはり……」

「ジヨゼ」

俺の気配を察知でもしたのか、母上が父上を制した。

「おっと、すまない。ではこの話は後でよろしいかな？」

「ええ。こちらはそれで構いません」

父上たちは、先ほどの空気が何事もなかったかのようにして俺に声をかけてきた。

「ほら、レクサ。そんなとこに立っていないで、こちらに入って来

なさい」

父上が俺を呼んだので、恐る恐る部屋の中に入った。

「あ、あの。思わず来てしまいました、ここに入っても良かったのでしょうか？」

流石に先ほどの空気が気になってしまって、思わず聞いてしまった。

「気にすることはないさ。そんなことよりも、ほら。お前が見つけたお陰で彼女は助かったんだぞ」

そう言って、彼女の目の前に俺を連れてきた。

「紹介しましょう。この子は息子のレクサナル。アリエスさん、あなたを見つけたで助けを呼んだのがこの子と、今は起きて来ていませんが、娘のシャロンです」

「そう。あなたが私を助けてくれたのね。ありがとう」

彼女はお礼を言って、満面の笑みで微笑んだ。

うはー。なんて綺麗な人なんだろう。

あの時は夜で暗かったしだったし、そもそもそれどころではなかったので全く気が付かなかったのだが、とても美しい人だ。

恐らく年の頃は二十代前半だろう。髪はルビーのように赤く流れるような長髪で、その瞳は力強く燃えるように赤い目がとても印象的だった。

「あ、はい。もうお身体は大丈夫でしょうか？」

俺は、突然の事だったので、少々戸惑ってしまった。

「ええ。これもあなたが助けを呼んでくれたお陰ね」

「い、いえ。そんな大したことはしてませんので…」

生まれてこのかた、こんな綺麗な女性にお礼を言われたことがなかったために（勿論家族は別だが）、俺はかなり動揺してしまった。

それこそ今でも心臓の動機が激しく、もしかしたら部屋中に俺の心臓の音が鳴り響いているかもしれない、と思えるくらいに動揺している。

落ち着けー、俺！！

向こうは年上、こっちは子供。うん、大丈夫。

勿論何が大丈夫なのだ？と言ったツツコミは受け付けないのであしからず。

それだけ、俺が動揺してるというわけなのだから。

「じゃあ、改めて自己紹介をしますね。私の名前はアリエス。一応冒険者をやっているの。ギルドの依頼でアウトウルゴスで仕事をし

て、その仕事が一段落したからギルドがあるエグリロスに帰る途中だったの」

「エグリロス？ アウトウールゴス？」

俺は彼女の口から出た知らない単語に思わず疑問の声を上げてしまった。

「ああ。レクサはまだ行ったことがないから知らないだろうね。折角だから教えてあげようか」

そう言って父上がわかりやすく説明してくれた。

どうやら、アウトウールゴスとは、貿易が主流の街のことで、陸路や水路での輸送で貿易の中継地点として栄えている都市のことらしい。正式名称が貿易都市アウトウールゴスという名前で、様々なものを各地から集まってくる場所なので、別名『資源のるつぼ』などとも呼ばれてたりもするんだって。

エグリロスは学術都市のことで、その名の通り、王国一、研究や学術が盛んな都市で、王国唯一の冒険者ギルドがある場所でもあるらしい。

あ、冒険者ギルドってのは、以前説明した冒険者たちが所属する組織で、世界各地に支部が点在しているんだって。その一つがエグリロスにもあるらしいんだ。

「そうだったんですか。……あれ？ じゃあなぜあんな大怪我を負ってたのですか？ それに、あんな夜中に」

俺は昨日の夜からの疑問をアリエスさんに聞いてみた。

「え！？」

俺がその質問をお姉さんに投げかけた途端、先ほどとは打って変わって急に動揺しだした。

「あ、ああそれは帰ってる途中で、ちょーっただけ手強い魔物に襲われてしまったのよ。ちょーっただけだね！　それで怪我を負ってしまったの」

「魔物ですか…。そうだったんですか」

なるほど。魔物とききましたか。なんだか物騒だなあ。まあ日頃から隠れて魔物の相手をしてる俺としては、別にビックリすることではないと思うのだけど。

「そ、そうなのよ。そ、それよりも、私がどうして大怪我を負っていたのがわかったのかな？　確か発見され時は、もう傷がふさがっていたという話だったと思うんだけど……」

うはッ！！！

マズイ！　これはかなり墓穴を掘ってしまったようだ！！

「え！　あ、えっと……。お姉さんを見つけたときに着ていた口ーブが凄い血まみれだったから、きつと大怪我をしたのかと思っただけです！　そ、そうだったんですか。大怪我はしてなかったんです

ね。よかったですね！」

「そ、そうなの?! そっか……。あははは……」
「うん！ あははは……」

と、とりあえず、これで誤魔化せたか？

お互いの渴いた笑いが診療所中に響いた。

先程までであった重苦しい空気がまるで嘘のようだ。

「さて、それじゃレクサ。そろそろ家に帰りなさい。私たちは少しだけアリシアさんとお話をしてから家に戻る」

「は、はい。分かりました」

ま、まあここはボロが出ないうちに、退散しておくのがいいだろうな。

正直ちょっと気になる事もあったのだけど、俺の秘密がバレてしまつては元も子もないしな。

俺はそう思い、診療所を後にした。

診療所から戻ってきた俺は、先ほどのことを思い返していた。

危なかった。危うく俺の秘密がバレるところだったな。

しかし、秘密といえば、彼女の話でちょっと気になる点があったよな。

そもそも、彼女は冒険者という職業をしているらしい。

仮にも冒険者だ。見た目的にも駆け出しには見えないし、恐らくそれ相応の能力があるはずだ。

それだけの能力を持っている可能性がある彼女が、あそこまでひどい怪我を負うものだろうか？

「うーん……」

何か隠しているような……。

俺が先ほどのことと考えていると、寝室からシャルが起きてきたよつだ。

「……あ。にーにい……。おはよう……」

まだ眠たいのであろう。目を擦りながら俺に挨拶する姿は、人の母（父）性本能を掻き立てる愛嬌が溢れ出ている。

「うわぁ……。俺の妹はマジ天使だわ……」

先ほどの疑問などすべて忘れてしまった俺は、その寝起き姿に心を奪われていた。

「……………？ にーにい……………だいじょうぶ？」

流石はシャルだな。マジ天使。

まあ当然だよな。シャルの可愛さを持ってすれば、世の中の男どもを魅了するなんて朝飯前のことかも知れないな。

将来が楽しみのようで、怖いものだなあ……………。

しかし、シャルも大きくなったら、男を連れて両親に挨拶なんて……………。

……………。

「俺は断じて認めんぞ！！」

「きゃあー！！」

思わず大声を叫んでしまったせいで、シャルがびっくりしてしまっただ。

「……………う」

俺のせいで、シャルが涙目になって、涙を我慢している。

やばい、やばい…

「あー。大きな声を出してしまつて、すまない！　そ、そうだ。そろそろ父上たちが戻ってくるだろうから、一緒に朝食の準備をしよう。な？」

「……うん」

ギリギリのところ、涙を抑えたシャルは俺と一緒に朝食の準備を始めた。

まあ準備といつても、ほとんど母上が作って出て言っていたので、テーブルを拭いて、食器を並べるくらいだった訳だが。

そんなことをしていたら、父上たちが戻ってきた。

「あら、そういえば朝食の準備の途中だったわね。ジョゼつたら、急に引つ張っていくんですもの。すっかり忘れていたわ」

「む。それはすまない。患者の一大事だったんだ。許してくれないか？」

「いいわよ。さあ食事にしましょう。あ、あとレクサ」

俺は飲水用の水を井戸に汲みに行く所で、母上に呼び止められた。

「なんですか？　母上」

「いえ。私たちの食事が終わってからでいいのだけど、アリエスさんの所に後で食事を運んで行って欲しいの。私たちはちょっと村長のところまで行かなきゃいけないから」

「村長のとこまでですか？ …分かりました。食事が終わってから
アリエスさんのところに運んで行きます」

「シャルも行く……」

シャルが俺の服の袖を掴んでそう言った。

「あらあら。相変わらず仲がいいわね。じゃあお願いね」

「はい(うん)」

食事が済んだ俺とシャルは、食事をアリエスさんのところへ運んだ。

シャルが「おしよくじ……、シャルがはこびたいです」なんて言いながら、目を潤ませて訴えかけてくるものだから、お兄ちゃんとしては転んでこぼしてしまうかも知れないけど、シャルに食器を運ぶ役目を譲ってあげたのさ。

まあ特に問題もなく(むしろ家の隣なわけだし、何か問題があったほうがおかしいのだが)食事をアリエスさんに持って行き、彼女の食事が終わった所で、シャルを紹介してちょっと雑談をした。

かなりの人見知りのシャルなのだが、アリエスさんのことはすんなり受け入れることができたらしく、俺のそばを離れて、彼女のベットのの中に入ってしまったくらい彼女に懐いた。

兄としてはうれしさ半分、悲しさ半分の気持ちだったのは言ってもない。

しばらく他愛もない話をしていたら、父上たちが村長のところから戻ってきたらしく、診療所に戻ってきた。

「二人共、ここにいたのか」

なぜか、二人共神妙な面持ちのまま、俺とシャルを見た。

「ちょうどよかった、二人とアリシアさんに話がある」

え？ 俺とシャルとアリシアさんに？

どうしたんだ？ 一体。

〜第6話 日常の終わり(2)〜(後書き)

新キャラ登場ですね。

といつても、未だにタイトルとなっている召喚が行われていない件については、まだちょっと先になりそうです。

タイトル詐欺にはするつもりは無いので、気長に見守ってください

w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5490x/>

兄転生、妹召喚

2011年12月11日06時47分発行